

「目をさましていなさい」

イザヤ書 第54章 1節～3節
マタイによる福音書 第25章 1節～13節

説教 岡村 恒 牧師

「だから、目をさましていなさい。その日その時が、あなたがたにはわからないからである。」(13節)主イエスのお言葉が響いています。この言葉は、主イエスご自身が言われたように、今、ここにいる私たちに向かって語られています。

私たちが今過ごしているこの時は、世の終わりを待ち望む時です。これは、何の希望も残っていない絶望の時ではありません。そうではなくて、期待に胸を踊らせながら、目をしっかり見開いて、ワクワクしながら楽しみに待つ。そういう「喜びの時」だと主イエスは言われます。

終末がなかなか来ないことにいらだち、不信仰になった初代教会に、マタイによる福音書は語りかけました。終末についての主イエスのたとえ話がいくつも続いて語られます。ここでは、結婚式の花嫁のたとえが登場します。

ユダヤの結婚式は、通常、夜開かれました。花嫁の家で花嫁とその友人たちが花婿を迎え、それから夜道を照らしながら婚宴の会場まで行くのです。十組の結婚式です。十人の内、五人は思慮が浅く、五人は思慮深い者だったと記されています。その違いは、予備の油を用意していたかどうか、ということのようです。しかし、花婿を待つ、ということにおいては違いがありません。ここでも、あの弟子たちのように、十人の花嫁は皆、一人残らず眠りこけてしまいました。喜びの時を待ちわびながら、しかし、目を覚ましていることはできなかつたのです。

「目を覚ましていなさい」、というのは、眠い目をこすりながら夜更かししなさい、という話ではありません。実際、このすぐ後で弟子たちはどうしても目を開けていることができませんでした。主イエスが、十字架での死を前にして、ゲッセマネの園でお祈りになった時です(26章36節～46節)。主イエスが死ぬほどの悲しみを味わいながら祈っておられるすぐ側で、「目を覚ましていなさい」と何度言われても、弟子たちは目を覚ましていることができなかつたのです。主イエスのお苦しみを、少しも理解したり、一緒に苦しむことはできませんでした。

先週、首から肩にかけて激しい痛みで襲われて、ほとんどの時間をベッドの上で過ごしました。首の骨の間が狭くなっていることから来る神経の痛みだと言われました。この痛みの中で、昨年末に召された姉妹のことを思い出しました。ご自身が痛みで苦しむ中で、「イエスさまが十字

架で味わって下さった痛みがどれほどのものか、初めて知った」と言い、寒気を感じる時に「ほとんど裸で十字架に磔にされたイエスさまは、どんなに寒かったことか初めて知った」と言われた姉妹の言葉です。私も、弟子たちと同じように、主イエスのお苦しみが少しも分かっていたいなくつたことに気づかされました。

私たちの教会は、「主のふたたび来たり給う日を待ち望む」と告白して歩んでいます。私たちは、婚宴の喜びの日を待っています。聖書では、教会は『キリストの花嫁』と呼ばれています。神のひとり子、主イエス・キリストが、十字架の上で深い苦しみと痛みを味わい、その命を与え尽くして手に入れて下さった花嫁、それが教会だと言うのです。だから私たちは、私たちの花婿がおいで下さるのを、この夜の闇の中で、灯りを準備して待ち続けています。たとえその途中で眠りこけてしまっても、その時の用意ができている者は、その日、その時、宴会の席に迎え入れられて、花婿と一緒に喜び祝うのです。

私たちは、主によって繰り返し目を覚まして頂きながら歩んでいます。生まれる前から信仰者の家庭で生まれ、信仰を養われて生きて来た者も、人生半ばにして初めて主に出会って頂き、信仰を与えられて歩んで来た者も、人生の終わりを前にして、ようやく主の御声を聞いて命の道に分け入った者も、灯りをその手にしていながら、眠りこけ、待つことをあきらめてしまいます。それでもなお、「あなたは私のものだ」と宣言して下さる花婿が来られるのです。待つことの喜びを繰り返し教え、ふさわしくない者をふさわしい者に造り変えて下さるお方が、来て下さいます。その終わりの日に、私たちを白い衣を着たキリストの花嫁として、神の家、婚宴のへやに迎え入れて下さいます。これが、聖書が語る福音です。

ただ主イエス・キリストを信じる信仰によって、罪の赦しの洗礼を授けられたという事実を握りしめて、私たちは喜びの宴にその身を置くことになるのです。

主イエスは、再び来られます。その日、その時がいつ来るかは分かりません。しかし、必ずその時が来るのです。私は来る、と言われた主の言葉は確実なので、私たちは確かな希望と共に、花婿を待つのです。

(記 岡村 恒)